

させていただきます



小浜の多田ヶ岳に会の仲間と登った。途中の峠に石像が二体あった。行者は黙して語らず。

過日の福井新聞の「越山若水」欄で、「歌わさせていただきます」という言い方に対する違和感が文法上の誤りによるものであることが説明されていたが、今書きたいのは、文法的に正しいのかどうかよく分からないが、なんとなく落ち着かない感じがする最近の「…させていただきます」の濫用についてである。

会議の案内が来てそこに出席する。司会者は開始にあたって、この頃は、必ずこう言う。「ただ今よりXX会議を開催させていただきます」

昔は「ただいまより会議を開催します」であった。とても気持ちが悪かった。凜としていた。

この「させていただきます」を聞くと、頼んだ覚えはないのに、なぜ「…させていただきます」なのだと思う突っ込みたくなる。この一言で、私とあなたとのよき関係はもう成立したのだから、あまり五月蠅いこと言わないで下さい、と言われているように感じるのである。

この後、「させていただきます」が頻出する。

「今回、XXについて調査させていただきましたが、それに関して報告させていただきます」

きます」

言葉がべたべたと、まとわりついてくるのである。この感じは同年配の友人も持っているようで、「させていただけます」にはまいるわと言う。

なぜ、こうも「させていただけます」が多用されるようになったのか。それは、自分一人のところで責任を全うする気概が薄れてきたせいでないかと、筆者は思っている。

野球中継が延びるときのテレビのいい方。

「野球中継はこのまま続けさせていただけます。洋画劇場は……」

昔はこうは言わなかった。前の言い方は、「野球中継はこのまま続けます」であった。

この「このまま続けます」には、「中継を続けることがイヤな方もおられることは分かっています、しかしそのところは曲げて我慢して下さい」などという卑屈ないいはまったく含まれていない。

「させていただけます」と言った時点で、責任は共有されるべきものであると宣言されたも同様で、その凶々しさに拒否感を覚えるのである。

「させていただけます」濫用のもうひとつの原因に、最近見られる他人との関係の取

り方の困難さがあるのではないか。

このごろは、他人との関係は、やたら親しいか全く無関心かの両極端しかないようで、その中間状態のどこに身を置いてどのような関係を保つのか、このことは肝心なことなのに、それに対する考慮が放棄されているように思う。毎日に疲れ、もうややこしいのはやめた、と言う声が聞こえる。

無関心であればそれで安全で、やたら親しければ、それはまたそれで快いのだろう。

「させていただきます」はこれからも減ることはないだろう。こういつておけば、それで一応共通の世界が保証されるのだから。

(二〇〇六年八月五日)